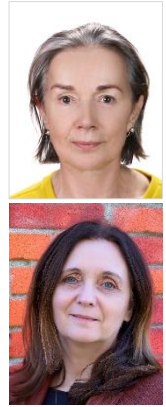


《第116回例会》
講演 & 上映会

どなたもご参加歓迎

2025. **6/10** (火) 18:30~
札幌エルプラザ4F 大研修室



ポーランドと日本：新渡戸稲造とポーランドの偉人たち

～ピウスツキ家の人々（ユゼフ&アレクサンドラ夫妻とブロンニスワフ）、
パデレフスキ、キュリー夫人ほか～

講師：ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ Jadwiga Rodowicz-Czechowska =上写真=
スレクヴェク市のユゼフ・ピウスツキ博物館 開発担当副館長、元駐日ポーランド共和国大使
マウゴジャータ・バサイ Malgorzata Basaj 同博物館 展示・普及部長 =下写真=

入場無料、定員50人、予約推奨【お問合せ先】 hokkaidopolandca@gmail.com, 080-4071-0956 (安藤)

講演1

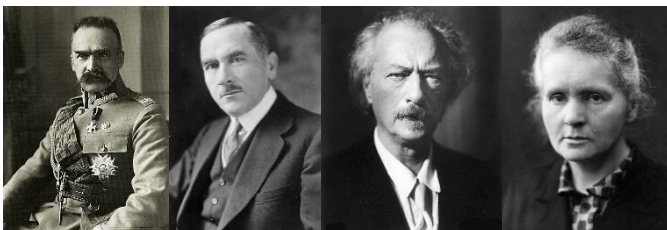
新渡戸稲造が語ったポーランドの英雄たち

ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ

新渡戸稲造(1862-1933)=写真=
は、台湾総督府民政部殖産局長
心得、ジュネーブの国際連盟事務
次長、国際連盟知的協力委員会
委員などとして日本政府のために
働いた。彼は平和主義者だったが、
植民地支配の推進者でもあった。



新渡戸はそのキャリアの中で数多くの人々と
出会い、後に日本人読者のために書いた著書、あま
り広くは知られていない『東西相触れて』(1928)と
『偉人群像』(1931)の中で彼らを「偉人」と呼び、そ
の言葉を記録し解釈した。彼自身「東洋と西洋の
架け橋」になりたかったのだ。ポーランド軍の指導
者ユゼフ・ピウスツキ(1867-1935)、国民民主派の
政治家ロマン・ドモフスキ(1864-1939)、首相であ
り名ピアニストでもあったイグナツィ・パデレフスキ
(1860-1941)、そして世界第一の女性科学者マリ
ア・スクウォドフスカ=キュリー(1867-1934)=下写真=
についての記述は、日本人が異なる文化的背景を
持つ外国の英雄をどのように見ていたかを知る上
で興味深い糸口となる。



新渡戸の見解は日本で軍国主義が台頭した時
代に発表された。彼が「偉大な」ポーランド人を描
写する方法は、社会を教育し「西洋」の価値観を植
え付けるといった目的に完璧に合致していた。逆説的
だが、彼は日本で排外主義が強まった時代に、出
会った人々の言葉や行為を選んで外国人(西洋人)
のロールモデルを作ろうとしたのである。

(日本語、30分)

講演2

19-20世紀の独立闘争におけるポーランド女性

マウゴジャータ・バサイ

独立運動における女性の活躍は、ポーランドが
独立を失ってから100年以上経った19世紀末から
20世紀初頭にかけて起こった。それ以前には、家
庭の守護者としての女性の役割という文化を打ち
破る長いプロセスがあった。それは西欧からポー
ランドに伝わったフェミニズムの潮流の結果というより、
独立の願望に女性も参加した結果であった。

19世紀ポーランドの女性解放プロセスにおける
重要な要因には、社会的・経済的関係の変化もあ
る。すなわち知識階級と労働者階級が分離し、女
性が収入のある仕事に就く必要があったのだ。そ
の重要な側面は、女性を専門的に教育し活動させ
る社会団体の活動に女性が参加したことだった。

彼女たちは独立・社会主義運動の中で、政治分
野(ポーランド社会党)でも活動し、労働者サークル
で扇動活動を行い、違法な新聞やビラやアピール、
武器や爆発物まで配達した。彼らは侵略者に対す
る戦闘行動の組織化にも参加した。

第一次世界大戦の勃発以前から、ユゼフ・ピウ

本イベントは、ポーランド共和国文化・国家遺産大臣の「Inspiring Culture 2025-2026」プログラムにより資金提供を受けています

スツキ率いる軍事運動の中で、女性たちの要求により、最初の女性小銃部隊が創設され、彼女たちはそこで軍事訓練を受けた。その結果、戦時中、彼女たちはポーランド軍団第一旅団の伝令・諜報部隊やポーランド秘密軍事組織の女性部隊で活躍した。軍の構成の中で彼女たちは小さなグループだったが、ポーランド軍に所属し勤務したという点で、後につづく世代に道を開いた。

1918年11月、ポーランド国家の再興とともにポーランド女性は完全な選挙権を獲得した。それから10年も経たない1927年5月、アレクサンドラ・ピウスツカ(1882-1963、元陰謀家・戦闘員、ユゼフ・ピウスツキの妻)の発案により、自由を求める闘いの元参加者たちのサークルの中で、女性戦士たちの手



記を書き残すという構想が生まれた。その結果、ユゼフ・ピウスツキとポーランド社会党を中心とする独立派左翼と思想的に結びついた世代の女性たちの集合的肖像となる100以上の証言が集められ『忠実な奉仕』という表題で出版された。

アレクサンドラ・ピウスツカとゾフィア・モラチェフスカ(1873-1958、ポーランド初代首相夫人)=上写真はこの潮流と連携して、自由ポーランド国家でも積極的に公的・政治的生活に参加した。

(ポーランド語+日本語通訳、合計40分) (安藤厚訳)

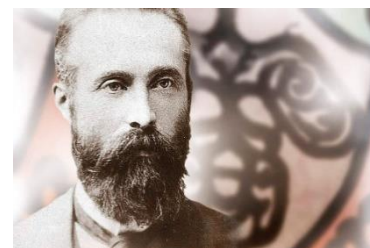
ドキュメンタリー映画『ピウスツキ・ブロニスワフ～流刑囚、民族学者、英雄』

ヴァルデマル・チェホフスキ監督 | 2016年 | 53分 | デジタル | 日本語字幕版

この映画は、ユゼフ・ピウスツキの兄で、逆境にもかかわらず、サハリンの先住民の文化の最も重要な研究者の一人となったブロニスワフ(1866-1918)の驚くべき伝記を紹介する。

苦しみを知識への情熱に変えることができた男の物語

サハリンへの道：流刑から科学へ



ブロニスワフは非常に魅力的な人物で、その人生はまるであり得ない冒険のシナリオのようだ。ポーランドの自由のための戦いに参加し、皇帝アレクサンドル3世に対する暗殺計画に加わった罪で有罪判決を受けた彼は、世界で最もアクセスしにくい土地のひとつであるサハリン島に追放された。

15年の禁固刑に減刑された死刑判決は、ピウスツキにとって並外れた科学的冒険の始まりとなった。ピウスツキは運命に屈することなく、強制された追放生活を先駆的な民族学調査の機会に変え、現地の人々の文化に対する認識を一変させた。

ピウスツキの民族学的発見

ブロニスワフ・ピウスツキの主要な業績は、サハリンに住むアイヌをはじめとする少数民族の生活と文化に関する包括的な研究であった。アイヌ最古の肉声を録音し、アイヌ研究の草分け的民族学者となるとともに、弱者の側に立ち少数民族の生活改善にも尽力した。

彼の研究は今日に至るまで、この忘れ去られた民族集団に関する人類学的知識の基礎資料となっている。2013年には白老に彼の記念碑が建立された。

ブロニスワフ・ピウスツキは、最も困難な状況にあっても夢を実現し、世界科学の発展に貢献できることを証明した。



ドキュメンタリー映画『ピウスツキ・ブロニスワフ』より